

乾シイタケの用途別代替 に関する計量分析

鳥取大学大学院・松本 典子

鳥取大学農学部・古塚 秀夫

鳥取大学農学部・松田 敏信

乾シイタケは、1985年のプラザ合意以降の円高と食生活の外部化を背景に、安価な中国産の輸入が急増したために、国内価格が低迷している。このことが国内の乾シイタケ生産に大きな影響を与えて、生産量は1984年の16,685tをピークに減少している。

本研究では、乾シイタケの日本産と中国産の需要分析を行って、①日本産と中国産の関係と、②日本産の各用途における規格間の代替関係と補完関係を明らかにする。分析データは、全農乾シイタケ市場（以下全農市場という）の規格別データと中国からの輸入データである。計測期間は1994年5月から2007年4月の13年間である。分析対象の規格は、各用途において取扱量が多い上位5規格のうちで、データが揃っている13規格である。なお、ここでいう用途とは、家庭用、業務用、輸出用である。また、規格を構成する要素は、大きさ、形状、色沢、採取時期である。

第1に、中国産と全農市場における取扱量と価格の推移（1988年から2007年まで、ただし、全農市場は1998年を除く）についてみる。長期傾向については、中国産の輸入量は1991年から1994年まで急増し、1997年の9,267tをピークに減少傾向にある。価格は1990年の1,657円/kgをピークに低下傾向である。全農市場の取扱量は横ばい傾向（約552t/年）であり、価格についても横ばい傾向（約3,601円/kg）である。季節変動については、中国産及び全農市場において取扱量、価格ともに平準化している。第2に、代替関係である。輸出用では、中国産が並どんこの、並どんこが小どんこの、業務用では、加工大が加工小の代替財である。①中国産と輸出用並どんこの関係については、両者は直接代替関係にはないが、香港市場における中国産のシェアが拡大したことによって、日本の輸出量が減少していることが原因と考えられる。②他の2つの代替関係からは「大きさ」を除く規格の構成要素が同じ性質で、しかも、価格格差が相対的に小さい規格間において代替関係が存在していることがわかる。第3に、補完関係である。家庭用では、特小上厚が特小並の、特小厚が特小並の、輸出用では、特小上厚が小どんこの、小どんこが特小厚の補完財である。家庭用では、「大きさ」と「色沢」が同じ規格間で、輸出用では、価格格差が相対的に小さい規格間で、いずれも、高価格の規格が低価格の規格の補完財になっていることがわかる。

本研究では、全農市場において①中国産の影響がないこと、②日本産においては価格格差が小さい規格間に代替関係と補完関係が存在していることを明らかにした。